様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２６ 日現在

機関番号：３４５０９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ０７９５７

研究課題名（和文）高齢者コホートにおける認知症リテラシー教育を活用した早期受診促進の前向き介入研究

研究課題名（英文）Community-based cohort study for elderly to promote early diagnosis for demntia

研究代表者
前田　潔（Maeda, Kiyoshi）

神戸学院大学・総合リハビリテーション学部・特命教授

研究者番号：８０１１６２５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：３つのテーマで調査を行った。テーマ①：地域の高齢者を対象に、既存の認知症リテラシー尺度をリテラシー講座受講前後に3回送付し、正答率を比較した。テーマ②：地域の高齢者を対象に、認知症のための医療機関受診についての質問票を2019年～2022年の3年間送付し、3年間の変化をリテラシー講座受講の有無で比較した。テーマ③：新たな日本語による認知症リテラシー評価尺度の作成を試みた。
テーマ①では認知症リテラシー講座等を受講することによりリテラシーが有意に向上した。テーマ②では、認知症の受診について、非受講群に比較し、受講群では受診率が高くなった。テーマ③では新たに、満足すべき評価尺度が作成できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
認知症患者は人口の高齢化に従って増加している。認知症に関する知識や情報を得て認知症予防や認知症の早期の気づきや早期受診、進行予防などについて理解すること（認知症リテラシー）は重要となっている。認知症リテラシー講座受講による認知症リテラシーの向上、講座受講と認知症検診受診の促進効果、を明かにし、認知症リテラシー評価尺度の開発を行った本研究は、認知症予防、進行予防を促進し、認知症リテラシーの向上の重要性を認識することとなり、学術的には無論、高齢社会のわが国の保健医療に社会的意義のあるものと思われる。

研究成果の概要（英文）：In this research project, research was conducted on three themes. 1: For community-dwelling elderly people, using an existing dementia literacy scale, dementia literacy questionnaires were sent three times before and after intervention. The percentage of correct answers was compared. 2: For community-dwelling elderly people, we sent questionnaires on how they felt about visiting medical institutions for dementia for three years from 2019 to 2022, and changes over the three years. We compared the literacy course participants and non-participants. 3: Targeting community-dwelling elderly people, with the aim of creating a dementia literacy scale in Japanese, we created a Japanese version of the scale and examined the validity of the scale.
1: literacy significantly improved by taking a dementia literacy course. 2: there was no significant change seen in the non-participation group, but the consultation rate increased in the attendance group. 3: we were able to create a satisfactory scale.

研究分野：老年精神医学

キーワード：認知症　認知症リテラシー　認知症リテラシー尺度　認知症リテラシー講座　地域在住高齢者　認知症の早期発見・早期受診

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

認知症に対する正しい知識と理解を持つことは、認知症予防や早期診断の促進につながると考えられる。近年、認知症に対する社会の理解促進に向けて、認知症リテラシーを向上するための取組が行われている。認知症リテラシーは 1997 年に Jorm が提唱した「精神保健リテラシー（Mental Health Literacy)」の定義に則すると「認知症の認識、マネジメントもしくは予防に役立つ認知症に関する知識や信念」と定義されるが、精神保健リテラシーの解釈がその後拡大し、次の 2 つを含むと考えられるようになった。すなわち「認知症に対する偏見または誤解を軽減すること」、「および認知症に対する支援受領に対する自信を高めること」である。

本研究課題では３つのテーマで調査研究を行った。テーマ①：地域在住高齢者を対象に、既存の認知症リテラシー評価尺度を参考に作成した尺度を用いて、リテラシー講座受講後、ブースター講座受講後の 2 回、認知症リテラシー質問票を送付し、正答率などを比較した。テーマ②：地域在住高齢者を対象に、認知症のための医療機関受診について、受診についての質問票を 2019 年～2022 年の 3 年間送付し、3 年間の変化をリテラシー講座受講群と非受講群を比較する調査を行った。テーマ③：日本語による認知症リテラシー評価尺度の作成を目的に、地域在住高齢者等を対象に、日本語による評価尺度を作成してその妥当性等を検討した。

２．研究の目的

(1) 認知症リテラシー講座の認知症リテラシーへの効果：

コホートの高齢者を対象に認知症リテラシー講座の効果を明らかにする目的で、対象者を対面受講、DVD 視聴、非介入の 3 群に分け、リテラシー講座を実施し、介入の違いによる認知症リテラシーへの効果を調査した。介入後にリテラシー尺度質問票を送付して回答を求め、介入の違いを比較した。またブースター講座の認知症リテラシーへの効果をブースター講座の前後に質問票を送付して認知症リテラシーを比較した。

(2) 認知症リテラシー講座の認知症早期受診への影響：

認知症に関する知識、情報を学習する認知症リテラシー講座受講の認知症の早期受診への効果を明らかにする目的で、高齢者を対象に認知症リテラシー講座を開催し、認知症のための受診について調査を行った。

(3) 認知症リテラシー評価尺度の作成：

これまで認知症の知識を測定する尺度開発が行われているが、いずれも英語での尺度であること、また認知症の偏見や誤解, 支援受領に対する評価が含まれていない。このような背景から日本語版認知症リテラシー尺度の開発を目指した。

３．研究の方法

(1) 認知症リテラシー講座の認知症リテラシーへの効果：

地域在住高齢者を①対面受講群、②DVD 受講群、③非受講群の 3 群に分け以下の調査を行った。調査１：対面講義は「認知症について」などを 3 回、週に 1 回、各 30 分行った。DVD 群は対面講義を DVD にしたものを送付した。2021 年 6 月に認知症リテラシー質問票（質問票）を対象者に郵送し回答を得た。調査 2：調査 1 における対面群および DVD 群を対象に、ブースター講座を実施した。ブースター講座終了後に再び質問票を送付し回答を回収した。

(2) 認知症リテラシー講座の認知症早期受診への影響：

高齢者を対象にリテラシー講座の認知症の受診への影響について調査した。

(3) 認知症リテラシー評価尺度の作成：

既存の認知症リテラシー評価尺度の内容を精査し、これにより新たに作成した「認知症の知識尺度」と「認知症への態度尺度」について、地域在住高齢者および大学生を対象として調査を行った。

４．研究成果

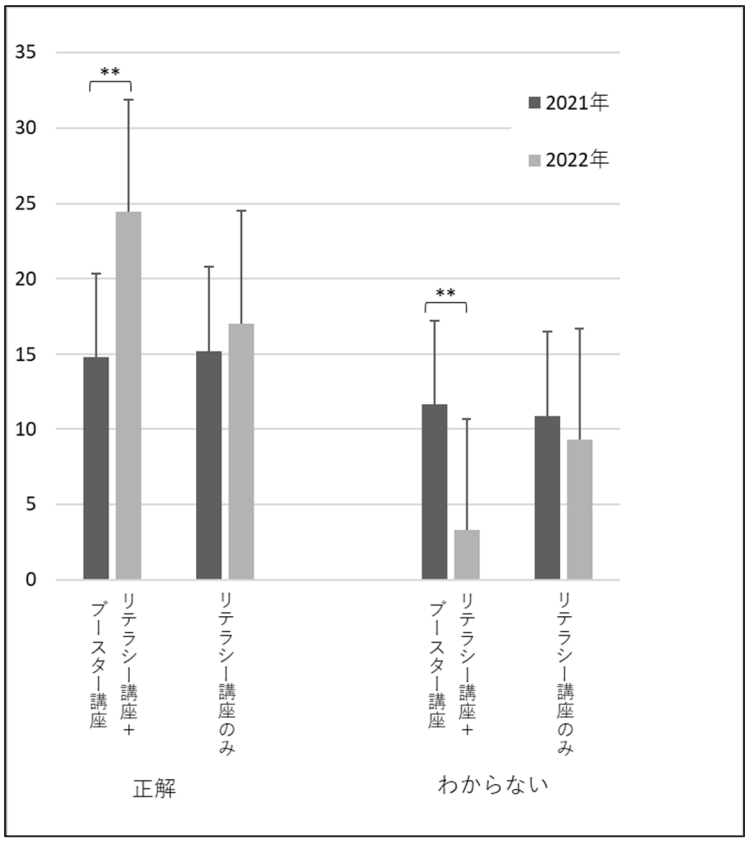
(1)認知症リテラシー講座の認知症リテラシーへの効果：

１）調査 1 の結果：調査票の正答数は対面受講群が最も多く、ついで DVD 受講群、ついで非受講群であった。対面受講群と DVD 受講群との正答数の違いは統計学的に有意であった。正答数は女性で得点が高かく、また年齢が上がるにつれて得点が低下した。教育年数が多くなるにしたがって得点が高くなった。

２）調査 2 の結果：リテラシー講座+ブースター講座受講群とリテラシー講座受講群の回答を比較した。調査 2 ではリテラシー講座受講群においては調査 1 に比較して正答数がわずかに増加し、「わからない」回答がわずかに減少していた。リテラシー講座+ブースター講座受講群においては調査 1 に比較して正答数が有意（$p<0.01$）に増加しており、「わからない」回答も有意（$p<0.01$）に減少していた。調査 2 における正答数を両群で比較してもリテラシー講座+ブースター講座受講群においてリテラシー講座受講群よりも有意（$p<0.01$）に多かった。

以上の結果から、リテラシー講座受講群では正答数がわずかに増加しており、「わからない」回答がわずかに減少していたが、ブースター講座受講群では正答数が 10 問近く増加し、「わからな

い」回答が質問の１割に減少していた。
　本調査の限界としては、調査の対象となった受講者数に群間で違いが大きかったことである。これは参加者の希望を尊重したからであり、希望を無視して無作為に群別に振り分けを行わなかったためであった。しかしながら群間の対象者数は可能な限り近いことが重要なことは言うまでもない。しかしながら以上からブースター講座のように情報/知識を繰り返し提供することによってリテラシーが向上するということが明らかとなった。



図．2021 年および 2022 年に実施したリテラシー尺度質問票（30 項目）の質問に対する回答。リテラシー講座のみ受講者とリテラシー講座およびブースター講座受講者の正解および「わからない」と答えた回答数の比較。

【文献】Smith, CA., et al,: An educational intervention to improve health literacy and decision making about supporting self-care among older Australians: a study protocol for a randomised controlled trial, Trials 18:44-54, 2017.

(2) 認知症リテラシー講座の認知症早期受診への影響：
「認知症診断助成制度を知っているか」の質問に対し、2019 年には 31.4%が「知っている」と回答したが、2022 年には 40.4%に増加していた。認知症リテラシー講座を受講した群（介入群）では 2019 年の「知っている」との回答は 57.1%が 2022 年には 71.8%に増加していたが、受講しなかった郡（非介入群）では 27.4%から 35.1%に増加しているに過ぎなかった。
「認知症の検査を受けたいですか」との質問に対して、介入群では 2019 年には 63.9%が「受けたい」と答え、2022 年には 69.2%と、受けたいという回答が増加したが、非介入群ではそれぞれが 2019 年には 41.8%、2022 年には 42.5%と大きな変化は見られなかった。
「認知症のために受診したか」の質問に対し 2020 年～2022 年の 3 回経年的に調査を行ったが、介入群では 2020 年には 27.0%が受診しており、それが 2021 年には 42.1%、2022 年には 33.3%と増加していた。非介入群ではそれぞれが 11.9%、15.0%、14.0%と大きな変化は見られなかった。
　地域在住高齢者を対象に、認知症の早期受診に関して 3 つの質問を行ったが、介入群では非介入群に比較して認知症の早期受診について前向きな回答が多かった。また介入群では非介入群に比較して前向きな回答は 2019 年から 2022 年へと時間の経過とともに増加する傾向が目立った。以上よりリテラシー講座は高齢者の認知症に関する制度や医療の受療に関して積極的な効果を有していると結論された。
【文献】Aihara, Y., et al., Public attitudes towards people living with dementia: A cross-sectional study in urban Japan Dementia 19:438-446, 2020

(3) 認知症リテラシー評価尺度の作成：
１）「認知症の知識尺度」の分析
　3 件法, 38 項目からなる認知症の知識尺度を用いて対象者に回答を依頼した。正答率が 8 割以上および 2 割未満の項目、また「分からない」の回答割合が多かった項目を除外した。それにより尺度は 25 項目となった。次にこの 25 項目の尺度について、内部一貫性を高めることを目的と

して各項目の項目合計（Item-Total：IT）相関係数と、当該項目を削除した場合の Cronbach の α 係数を確認し、IT 相関が 0.4 未満の 9 項目を除外した。採用した 16 項目について探索的因子分析を行ったところ、この尺度は１つの因子で構成されていると判断することができた。

２）「認知症への態度尺度」の分析

2.1. 主因子法による因子分析

「非常にそう思う」「そう思う」「どちらでもない」「そう思わない」「全くそう思わない」の５件法の認知症への態度尺度（26 項目）を用いて対象者に回答を依頼した。この結果について逆転項目の処理を行ったうえで主因子法による因子分析を行った。scree plot によって確認したところ 3 因子構造が妥当であると考えられた。そこで 3 因子構造を仮定して再度主因子法および Promax 回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量が 0.4 未満で低値であった 7 項目を分析から除外した。再び主因子法・Promax 回転によって因子分析を行った。なお回転前の 3 因子で 19 項目の全分散を説明する割合は 36.3%であり、3 つの因子は相互に正の相関関係にあった。

第１因子は 9 項目で構成されており、認知症の人への理解に関する項目のため、「理解」因子と命名した。第 2 因子は６項目で構成され、認知症の人への印象についての項目だったため、「印象」因子とした。第３因子は４項目からなり、認知症への対応に関する項目のため、「対応」因子とした。

2.2.認知症への態度尺度について

因子分析により設定した「理解」「印象」「対応」の 3 つの下位尺度の内的整合性を検討した。「理解」因子については、Cronbach の α 係数は 0.82 であった。同様に「印象」因子ではα係数は 0.73、「対応」因子では 0.66 となった。次に因子を構成する各項目の IT 相関係数と、当該項目を削除した場合の Cronbach の α 係数を確認した。3 つの因子ともに項目を削除した場合の α 係数が全体の α 係数を上回るものがなかったため、すべての項目を含めることとした。

上記のように認知症への態度尺度について因子分析および下位尺度間の内的整合性を確認した結果、26 項目中 9 項目が除外対象となり、「理解」(9 項目)、「印象」(6 項目)、「対応」(4 項目）の 3 つの因子からなる合計 19 項目の新たな尺度が作成された。

以上、海外で使用されている認知症リテラシーの評価尺度を参考にして、「認知症の知識尺度」「認知症への態度尺度」からなる新たな日本語版リテラシー尺度の開発を試みた。最終的には項目間の内的整合性の確認された 16 項目の知識尺度、19 項目の態度尺度を作成することができた。

これまで認知症リテラシーを評価する日本語版尺度が普及していなかったことにより受講者のリテラシーの向上を客観的に確認することはほとんどおこなわれることはなかった。受講者自身が知識の向上を数値として確認できれば自己効力感の向上にもつながり、さらなる知識の獲得への意欲向上も期待できる。

【文献】1. Christine Toye, Leanne Lester, Aurora Popescu, et al : Dementia Knowledge Assessment Tool Version Two: development of a tool to inform preparation for care planning and delivery in families and care staff. Dementia. 2014 ; 13(2) : 248-56.
2. Takashi Amano, Katsuo Yamanaka, Brian D Carpenter : Reliability and validity of the Japanese version of the Alzheimer's Disease Knowledge Scale. Dementia. 2019 ; 18(2) : 599-612.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計18件（うち査読付論文　15件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 尾嵜遠見、Nick Hird、古和久朋、前田潔	４．巻 20(2)
２．論文標題 神戸・兵庫から発信する新たな認知症予防とケア	５．発行年 2023年
３．雑誌名 老年精神医学雑誌	６．最初と最後の頁 掲載予定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 前田潔、長谷川典子、土井池良夫、福井則子	４．巻 31(5)
２．論文標題 認知症「神戸モデル」、認知症診断助成制度と事故救済制度、利用者アンケート調査結果　ー認知症の早期診断は市民から受け入れられているかー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 老年精神医学雑誌	６．最初と最後の頁 481-489
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hiroyuki Kajita, Kiyoshi Maeda, Tohmi Osaki et al	４．巻 22
２．論文標題 The Effect of a Multimodal Dementia Prevention Program Involving Community-Dwelling Elderly	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Psychogeriatrics	６．最初と最後の頁 113-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/psyg.12790.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 朴白順，大上哲也，樫林哲雄，古和久朋，徳田真，小野玲，中野高広，山上徹也，前田潔	４．巻 36
２．論文標題 認知機能簡易測定ツール「脳活バランサーCogEvo」の有効性についての予備的検討：地域在住高齢者および医療機関受診者を対象として	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Dementia Japan	６．最初と最後の頁 322-335
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yoko Aihara, Maeda Kiyoshi	4．巻 -
2．論文標題 Depressive symptoms in community-dwelling older adults in Japan before and during the COVID-19 pandemic	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Int J Geriatr Psychiatry	6．最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/gps.5558	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 梶田博之，福井則子，前田潔	4．巻 19
2．論文標題 大学の作業療法士養成課程における認知症教育の効果　－認知症リテラシーの向上を目指して－	5．発行年 2022年
3．雑誌名 仁明会精神医学雑誌	6．最初と最後の頁 28-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hiroshi Yoshino, Hisatomo Kowa, Kiyoshi Maeda, Hajime Takechi.	4．巻 21
2．論文標題 Eight months observation of check-up system “Kobe dementia model” of dementia in Kobe City".	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Psychogeriatrics	6．最初と最後の頁 246-248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 前田潔、相原洋子、梶田博之、福井則子	4．巻 18
2．論文標題 認知症に対する神戸市の取り組みー認知症「神戸モデル」－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 仁明会精神医学研究	6．最初と最後の頁 73-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 長谷川典子、前田潔	4．巻 32
2．論文標題 新型コロナウィルス感染症流行下における神戸市の認知症施策－認知症神戸モデルの現状と課題－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 老年精神医学雑誌	6．最初と最後の頁 856-863
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yoko Aihara, Maeda Kiyoshi	4．巻 -
2．論文標題 Depressive symptoms in community-dwelling older adults in Japan before and during the COVID-19 pandemic	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Int J Geriatr Psychiatry	6．最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/gps.5558	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Maeda Kiyoshi、Hasegawa Noriko	4．巻 20
2．論文標題 The Dementia Kobe Model: initiatives to promote a Dementia Friendly Community in Kobe City, Japan	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Psychogeriatrics	6．最初と最後の頁 353～354
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/psyg.12505	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Aihara Yoko、Maeda Kiyoshi	4．巻 17
2．論文標題 Dementia Literacy and Willingness to Dementia Screening	5．発行年 2020年
3．雑誌名 International Journal of Environmental Research and Public Health	6．最初と最後の頁 8134～8134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/ijerph17218134	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Aihara Yoko、Maeda Kiyoshi	4．巻 35
2．論文標題 Intention to undergo dementia screening in primary care settings among community‐dwelling older people	5．発行年 2020年
3．雑誌名 International Journal of Geriatric Psychiatry	6．最初と最後の頁 1036～1042
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/gps.5326	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Aihara Yoko、Maeda Kiyoshi	4．巻 -
2．論文標題 National dementia supporter programme in Japan	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Dementia	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/1471301220967570	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yoshino Hiroshi、Kowa Hisatomo、Maeda Kiyoshi、Takechi Hajime	4．巻 21
2．論文標題 Eight months observation of check‐up system ‘Kobe dementia model’ of dementia in Kobe City	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Psychogeriatrics	6．最初と最後の頁 246～248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/psyg.12649	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 相原洋子、前田潔	4．巻 67(8)
2．論文標題 男女別にみた都市旧ニュータウンに居住する高齢者の認知症時の居場所と支援に対する希望.	5．発行年 2020年
3．雑誌名 厚生の指標	6．最初と最後の頁 21-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 梶田博之、尾嵜遠視、前田潔	4．巻 10(2)
2．論文標題 地域高齢者を対象とした認知症予防プログラムの効果、［特集］認知症の発症前と発症後、それぞれに対する神戸市の取り組み、地域住民対象の疫学研究から学ぶもの	5．発行年 2020年
3．雑誌名 認知症の最新医療	6．最初と最後の頁 74-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 長谷川典子、前田潔	4．巻 10(2)
2．論文標題 神戸市における認知症施策の紹介、［特集］認知症の発症前と発症後、それぞれに対する神戸市の取り組み、地域住民対象の疫学研究から学ぶもの	5．発行年 2020年
3．雑誌名 認知症の最新医療	6．最初と最後の頁 78-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　4件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 前田潔、相原洋子
2．発表標題 認知症リテラシー教育－認知症の早期受診における意義－
3．学会等名 第10回認知症予防学会学術集会（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 前田潔、福井則子
2．発表標題 コロナ過における認知症高齢者～神戸市における取り組み～
3．学会等名 第6回神戸看護学会学術集会（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 Aihara Y, Ishihara I
２．発表標題 A cross-sectional study evaluating health literacy among community care worker
３．学会等名 International Conference on Communication in Healthcare(ICCH)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 相原洋子、石原逸子
２．発表標題 地域包括支援センター職員のヘルスリテラシーの知識
３．学会等名 第62回日本老年社会科学大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 相原洋子、石原逸子
２．発表標題 地域包括支援センター職員のヘルスリテラシーの理解と支援役割の認識
３．学会等名 第12回日本ヘルスコミュニケーション学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 相原洋子、石原逸子
２．発表標題 地域包括支援センター職員のヘルスコミュニケーションの実態
３．学会等名 第79回日本公衆衛生学会総会
４．発表年 2020年

１．発表者名 前田潔、福井則子
２．発表標題 認知症の早期診断に対する神戸市の取り組み－その後－　～自治体の実施する認知症診断助成制度はなぜ成功したか～
３．学会等名 第26回日本老年精神学会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 長谷川典子、前田潔
２．発表標題 認知症神戸モデルにおける早期診断を推進するためのしくみの実際：認知機能検診から鑑別診断への連携と診断後支援としての事故救済の現状と課題
３．学会等名 第26回日本老年精神学会（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

認知症の人にやさしいまちづくり研究講座/ダウンロード/映像 http://www.dementia-friendly.jp/download.html 小冊子「○×で学ぶ認知症リテラシー教育　認知症を正しく理解し行動しよう」（非売品：研究協力者と該当地域の地域包括支援センター等に配布）発行日：2022年12月15日　監修：前田潔　編著者：前田潔、梶田博之、福井則子　発行所：神戸学院大学総合リハビリテーション学部認知症のひとにやさしいまちづくり研究プロジェクト　印刷・製本：菱三印刷株式会社

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	相原　洋子 (Aihara Yoko) (90453414)	神戸学院大学・総合リハビリテーション学部・特命准教授 (34509)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	梶田　博之 (Kajita Hiroyuki) (00441197)	神戸学院大学・総合リハビリテーション学部・助教 (34509)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関